## 流された家の中で九死に一生

~津波は防災マップどおりには来なかった~

(釜石仮設団地 50代 女性)

揺れが止まるのを待って、仏壇を片づけたり、父親の写真が落ちたのでそれを タンスの中に入れたりしていました。でも、あまりにも家の前の国道をみなさんが 逃げて行くので、夜勤明けで家にいた息子が「ちょっと防災センターを見てくる」と 言って出かけて、戻ってくるなり「津波だ!」と叫びました。

足もとを見たらすごい水が来ていて、気がついたらもう水の上って感じで、母親と 息子、うちの2階に逃げてきた妹夫婦と私の5人が家ごと流されてしまったのです。

メリメリバリバリバリッと家が壊れる音の中、車がヒュッと飛んで向かいの 山にぶつかるのを見たりしながら波の流れにほんろうされていました。いったん流 れが止まり、家が止まったんですが、今度は引き波で家が回転し、バリバリッと壊 れながら海の方に引かれて行きました。

その後、次の津波が来た時にそのまま後ろ向きで陸の方に流され、お寺のすぐ前のところで何かに引っかかって止まりました。自衛隊に救助されたのは13日の朝でした。 私はいつも防災マップを意識していました。うちの辺りは津波が川の堤防を超えた場合の到達点だったので、ピチャピチャという状態を想像していて、3メーターの津波と報道された時にもせっぱ詰まった状態とは思わず、安心していました。それが家ごと流されるなんてね。想像もつかないことが起こりました。



## できる人がやるしかない

~津波の合間に必死の救助~

(釜石仮設団地 60代 男性)

テレビでよく映像が流れますが、映像で見る震災の状況と、実際に肌で感じる臭いであったり、風であったり、音であったりというものとは、全然違うわけですよね。 泣き叫んでしゃがんで立てない人もいたけれど、みんな自分がどうするかが先決で、 それをかまってやれない状況でした。

人が流されているのを上から見て、「電柱なり、ポールなりにとにかく捕まれ!離すな!離すな!」と言っておいて、波が引いて行った時に降りて行きました。いつまた津波が来るか分かんないから、こっちは早く助けに行こうとあせるけど、膝の高さまで水があったら身体をもっていかれちゃう。やっとたどり着いても、物にすがっている人は、手を離せと言っても硬直しちゃって離せない。もう水を含んでいるから重いでしょ、二人ぐらいで抱き上げて助けました。

次に大きな波が来た時、さっき人を助けていた時に来ていたらどうなったんだろうと思ったけど、その波が引くと、だまって見ていられないんです。感謝もなにもあの時はそれが当たり前でしたし、足がすくんで助けに行けない人が悪いんじゃないんです。できる人がやるしかない、誰を恨むじゃなしにね。

自分たちはこの震災で全てをなくしてしまって、ゼロどころか、マイナスからのスタートになっちゃった。じゃ、その気持ちをどこにぶつけるかといっても、ぶつける場所がないんですよね。自然しかないんです。あとは自分たちがこれからどうしようと考えるしかないんです。



## 地域を守る使命感

~とにもかくにも道を通す~

(宮古市 50代 男性 建設会社社長)

私たち建設会社は道路の維持管理を請け負っています。ただ、お金をもらっているからやるというのじゃなくて、地元を守りたい、必要とされているからやっているんです。「ここを守っているのは自分たちなんだ」という気概を持って仕事をしています。これは社員にも何度も繰り返し伝えています。

震災発生後は、沿岸に向かうルート確保のために国が実施した『くしの歯作戦※』に加わりました。それは、とにもかくにも主要道路の国道45号線まで道を通そうというもの。それができなければ支援物資も、燃料を運ぶ緊急車両も通れませんからね。

初めての津波災害への対応でしたが、私は判断を現場監督に委ねました。「信頼 しているからここは誰々に任せる」ということでないと現場は動きません。「全部お まえに任せる」というのは正直一番つらいのですが、社員たちは本当に良くやって くれたと思います。

いろんな計画を立てて、いろんな準備をするのも大事ですけれども、現場の判断 というのは非常に大切ではないかと思います。現場で判断するためには、知識、判 断力と信頼関係を培っていくことが大事なんです。

※くしの歯作戦とは、東北道、国道4号から津波被害で大きな被害が想定される沿岸部の国道6号、 45号への進出のための「くしの歯型」救援15ルートを通行可能にしたもの。



#### 建てかえるより倒れない家にする

穴水市 60代 女性

余震のたびに危険度が増していって、このあたりで有名な築100何十年の旧家もつぶすことになりました。古いハリなどは一つひとつバラし、うるしを塗った黒塗りの柱なども再利用するそうです。けど、残念でもったいないなと思います。

家を建てかえるとしても半年以上かかるし、莫大な費用とその間の不自由な思いを考えれば、事前に平時から家が倒れないように補強した方がいいんじゃないかなとつくづく思いました。



### 必要だった火山の知識

#### 噴火後からでも学習を

長崎市 40代 女性

記者としてほんとうに悔しいのは、平成3年の6月3日に大火砕流\*が発生して、多くの方が犠牲になるまで、私自身、恐いと思ったこともないし、危機感が全然なかったということなんですね。

実は、その数日前に、大学の先生に、「記者さん、マスコミが 今いるあの場所は、もうほんとうに危ないよ」と言われたんで す。そんなにきつい調子ではないけれど、「ほんとうに危ないか ら、下がりなさい」と。

その「危ない」という言葉を、「そこにいたら死ぬんだ」というふうに置きかえて理解できなかったのは、火山に関する基礎的な知識が不足していたからだと思います。平成2年の噴火以来、あれだけ時間があったのに、私たちは火山のことを勉強していなかったのです。

今なら、噴火前の煙があがっているだけの状態であっても、 先生の忠告に耳をかたむけることができる、そんな気がします。

\*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



# 一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

-簡単な手順を紹介します-

まず、過去の自然災害(地震、水害等)の中から対象を選ぶ

-

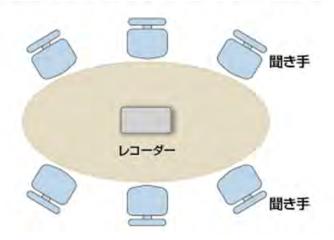
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける



みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間



なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、 体験したり感じたことを話し合ってもらう ※話し手は、2人~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける



テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

- ※物語は、300字~500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
- ※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的



作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省